

総括研究報告書

1. 研究開発課題名： 知的障害者、発達障害者の支援における多分野共通のアセスメントと情報共有手段の開発に関する研究

2. 研究開発代表者： 安達潤（北海道大学大学院教育学研究院）

3. 研究開発の成果：

1) 本研究開発の目的と内容

目的は、知的・発達障害者への実効性あるライフコース支援の実現である。研究開発内容は多分野共通の評価パッケージ、評価パッケージをICTサーバー上で運用するシステム（情報共有フォーマット・情報共有プラットフォーム）の開発、情報共有先進地域の視察調査である。

2) 情報共有フォーマットおよび情報共有プラットフォーム

知的障害・発達障害の対象児者に関わる評価情報の記載と関係者間共有から支援を構築するシステムである。今年度、情報共有フォーマットと情報共有プラットフォームを一体的に開発してきたが、情報共有フォーマットについては評価情報を「早期発見・早期支援」「精神科医療」「障害者福祉」「障害者雇用」「不登校・ひきこもり」「非行・矯正教育」「老人介護」の7支援分野についてICFの「健康状態」「心身機能」「活動と参加」「環境因子」「個人因子」の5構成要素で整理する構成とし、各構成要素の状態を把握できる者とした。情報共有プラットフォームの機能としては、(1)管理者IDと利用者IDの設定、(2)評価手順に沿った画面遷移（支援対象者IDを入力後、支援分野の選択、次にICF構成要素の選択、項目評価、データ保存）、(3)支援対象者IDによる評価情報の抽出と表示、(4)特定の支援対象者に関する項目評価結果の一覧表示、(5)評価データのCSVダウンロードができる。

3) 評価パッケージの開発

3-1) 発達障害者支援センターを対象とした情報共有に関する実態調査

既存の評価尺度に先行する第一次評価のための評価項目シート開発の基本情報を得るために全国の発達障害者支援センターを対象に、情報共有の場面、目的、参加者、共有情報内容、情報の伝達方法の5項目について実態調査を行った。結果、「参加者」には当事者を含むべきこと、「共有情報内容」は共有情報の種類と分布が支援分野間で異なっており、多様な支援ケースに対応しつつ情報共有を実現するには、項目を絞り込んだ「評価パッケージ」は妥当ではないと判断された。

3-2) 評価項目シートの開発

開発した評価項目シート（案）はICF-CYの評価項目を活用し、かつ評価の労力を下げるために評価者を、ICF-CY構成要素の「健康状態」は医師、「心身機能」は医師およびコメディカルスタッフ、「活動と参加」「環境因子」「個人因子」の3つは医師やコメディカルスタッフを含むより広い支援者と当事者に定めた。評価の仕組みは、「ICF-CYの全項目の評価を求めない」、「全項目を一つずつ確認する評価方法としない」ために、ICF-CYの第1レベル分類と第2レベル分類の間に中間小見出しを設けて、その記載内容によって、当該中間小見出し下の項目（第2レベル項目および必要に応じて第3レベル項目）を評価するか否かを判断できるものとした。

3-3) ASD・ADHDの他記式・自記式評定シートの開発

我が国では青年期・成人期のASD・ADHDの診断が不十分であり、適切な評定尺度も存在しないことから当該期対象のASD・ADHDの準診断情報を得る尺度（他記式、自記式）開発の予備調査を行った。尺度構成は4選択肢評定の50項目である。妥当性と信頼性（内的整合性）の検討を行い、予備調査の結果から表現等の改変を行って十分な有用性が確認された。

4) 情報共有試行のモデル地域の調査・選定

情報共有試行モデル地域の調査・選定の事前情報収集として、情報共有先進地域として知られる新潟県三条市（教育委員会）、障害者との共生地域モデルで知られる石川県金沢市（Share金沢）の視察・ヒアリングを行った。両地域の視察を通じて、関係者間の情報共有を行政システムの工夫だけで実現することには課題もあること、また地域の包容力という環境要因を情報共有モデルの中に関連づけていくことの有用性が把握された。